

当面の技術対策（農産編）

平成23年8月15日

発行：ゆとりみらい21推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

気温が高めで経過していることから、過繁茂状態のほ場が多く見られます。引き続き病害虫の発生には十分注意して下さい。また、H24年産秋まき小麦の適期は種に向け、前作物の収穫作業や作付予定地の管理を計画的に行いましょう。

1 秋まき小麦

- (1) 収穫跡地は、麦稈搬出の有無にかかわらずチョッパ等で細断し、ロータリをかけて浅く土壌にすき込み、分解を促進しましょう。
- (2) 収穫跡地の緑肥は収量確保のため8月20日頃までに、は種しましょう。
- (3) やむを得ず秋まき小麦を連作する場合には、雑草の再生や野良生えの発生を待って(草丈15cm程度)、は種前にグリホサート系薬剤(ラウンドアップ[®]等)で除草処理を行いましょう。但し、散布時には周辺に飛散させないように十分注意して下さい。

2 てんさい

- (1) 高温多湿状態が続いているので褐斑病、葉腐病の発生に十分注意し、予防に努めて下さい。
- (2) 例年8月下旬頃からヨトウガの第2世代幼虫が発生し始めます。また、昨年多発生した『シロオビノメイガ』の発生が確認されていますので、両害虫に効果が確認されているIGR剤(マッチ乳剤、カスケード乳剤等)を選択し、防除してください。
- (3) 雑草の抜き取り作業は、種子が落ちる前に実施しましょう。
- (4) 来年使用する育苗土は早期に確保し、pH矯正や腐植の乏しい育苗土には完熟堆肥を混和するなど、十分な調整を行いましょう。調整した育苗土はシート等で覆い雨水の浸透を防ぎましょう。

育苗土の酸度矯正目標：pH6.0

3 馬鈴しょ

- (1) 収量・品質は坪掘り等により早めに確認し、適期収穫に向け計画的に茎葉処理を行って下さい。
- (2) 茎葉処理の留意点
 - リーフチョッパーによる茎葉処理
 - ア 刈り損じやかけすぎは、中心空洞や塊茎腐敗、緑化等の発生要因となるので、機械を十分に調整します。刈り損じが多い場合には、再処理又は手刈り等の対応が必要です。
 - イ 塊茎の緑化や損傷を防止するため、トラクターには管理タイヤを装着します。
 - ウ 収穫作業の目安は茎葉処理後10日目以降となるので、定期的に試し掘りを行い塊茎表皮のコルク化状況を確認して下さい。

薬剤による茎葉処理

- ア 接触剤なので茎葉に薬剤をまんべんなく付着させます。
- イ 茎葉黄変前や土壌が極端に乾燥しているときの散布は、維管束褐変が生じやすいので、使用を避けましょう。

(3) 収穫作業の留意点

- 皮むけ・傷や打撲の防止のため、表皮がコルク化してから収穫を始めましょう。
 - 打撲障害防止のため、収穫機械の調整・整備を十分行いましょう。
 - ア 緩衝材が外れたり、劣化して固くなっていないか点検します。
 - イ 塊茎落下の高さは20cm以内とし、落下場所にはゴムなどでクッションを設け、塊茎への衝撃を軽減します。
 - ウ 収穫作業開始時や土壌条件が変化した(乾燥等)場合は、第一コンベアへの土の上がり状況を確認し、適切な土量となるようコンベア速度等の調整を行いましょう。
- 収穫後、高温の直射日光下に放置すると腐敗や変色が急速に進む「日焼け」が発生します。収穫した塊茎は直ちに風通しの良い日陰に収納して風乾を促しましょう。また、緑化防止のために光が当たらないようにしましょう。

4 豆類

- (1) 高温による徒長のため、倒伏したほ場も見られます。菌核病・灰色かび病の多発が懸念されますので、散布水量を多めにして防除しましょう。
- (2) 菌核病・灰色かび病の防除は、耐性菌の出現を防ぐため、同一系統薬剤を連用しないようにローテーション防除に努めて下さい(ゲッター、プロドリ、トップジムは同じ成分(チオアネートメル)を含むので連用を避ける)。

気温の高い日が続いています。

無理な作業を控えて、適度な休憩・休息を取りましょう！

農薬の適正使用に努め、生産履歴は忘れずに記帳しましょう！